

第 2 話 : 謎の少女

(1)

空がしらみはじめている。

仔猫も、ちょこちょこと唱太の横をついてくる。

その仔猫が、不意に立ち止まり、天空を見上げてうなり始めた。

「ふうううう！！」

「んっ……。どうした？」

もう、そろそろ、朝日が昇ろうとしている
東雲時(しのめどき)に、空の水色と
ラヴェンダー色と、柿色が交じり合う一瞬に、
天地を刺し貫く電光が、轟音とともに、あたりに響き渡る。

何事かと野次馬が集まる中、唱太もまたその中にいた。
土埃がもうもうと舞う中に、直径二メートルほどの、
小さなクレーターができている。

不思議なことに、そのクレーターの範囲の外で、
建築物の物損的破壊は、全く、起きてはいなかった。
どうやら、サトおばさんの店も無事な様だ。
唱太は、ほっとすると、ようやく、周囲に注意の目がいった。

そんな唱太が見たのは、クレーターの上に、球状の翡翠の光が浮かんで、
朝の日差しに負けないくらいの輝きを放っている光景だった。

唱太の視線に刺されたように、その光球は、ぱあんと弾けるように爆発すると、
光が止んだクレーターの中央に、大地に届くほどに伸びた、碧緑の、爆風に棚引く、
ツインテールの少女の影が、埃の舞う中、屹立し、
唱太の視界がはっきりするころには、どっと崩れ落ちるように、
くぼみの中に、膝から、倒れ伏してしまった。

異常事態に、他の野次馬がびびって近づかない中、

唱太と子猫だけが、駆け寄っていく。

「おいっ。大丈夫か？」

近くよってみると、少女は、碧緑の髪の毛に同じ色の柳眉を持ち、輪郭は玉子のとがった方を下にしたような曲線を経た小顔、勝気そうではあるが、愛嬌のありそうな、少し釣り目の二重まぶた、その幾重にも重なられた、深く長い睫毛は、しっかりと閉じている、形の良い高めの鼻、そこから、綺麗な声が産まれそうな小さな形の良い唇は、薄い薔薇色に彩られていたが、気を失っているのか口をわずかに開いていた。

思わず、唱太が息を呑んだのは、思春期のエロ以外に、理由がある。彼女が、すぐにでも、芸能プロダクションからオファーが入りそうな、白磁の肌の相当な美少女だったからだ。

だから、思わず、移調 唱太は、彼女に触ることをためらってしまう。残念なことに、ヘッドセットをつけた耳元は確かめようがなかったが、その双髪は黒地に赤のラインの入った方形のリボンのようなもので、両脇にまとめ上げている。

その美少女の服装といえば、裁断面にチャック状の、緑のLEDの縁取りが付いた黒革のジャケットに、肩の部分のみ直角に切り取ったデザインの、長袖の袖口が髪色に合わせた碧緑の服をまとい、同じデザインのミニスカで、スカートにもフリル状に、LEDが装飾してある。

そのスカートからは、すらりと長い脚がのびていて、絶対領域ぎりぎりから、統一されたデザインのブーツが足元まで覆っている。

唱太が、抱えあげると、ぶうんっと、かすかに起動音がして、その少女は、長い睫毛を持ち上げるように目を開き、澄んだエメラルドの瞳をしばし、またたいて、眼の前にいる少年にむけると澄んだ可愛らしい声で尋ねる。

「ここは…？あなたが、マスターですか？」

「えっ？うん。ここは、日本だよ。日本の笙野市。」

唱太は、反射的に承諾した。わかりました。と、その少女は言って、

自分が落ちてきた上空を、きっ！と睨み返す。

見ると、上空にぽっかりと開いた穴から、
耳障りな音を響かせる何かが湧（わ）いてきている。
しばらくしてから、黒い雷光が地上に走り、
その後、何処からか聞こえる、羊の鳴き声に、
唱太は、嫌な予感がした…

(2)

「ちくしょう。あれっぼっちの居眠りで
がたがたいいやがって。課長のやつ。」

唱太に、ビールの空き缶を投げつけた酔っ払いが、
野次馬の中でとぐろをまいていると、天空に開いた穴から、
何かが自分を呼んでいる。
その声に耳を貸したのが、その男の不運だった。

その何かは彼に憑依すると、粘土をこねるように形をとり、悪夢に出そうな形に、具現化する。その姿は、不可思議な大樹の姿を形どる。その大樹を覆いつくす、非常に大きなメロンに似た熟しきった実からは、黄色い綿毛に覆われた数頭の子羊が顔をのぞかせて、飛行機の騒音に匹敵する様なうるさい泣き声をあげている。うるさいのだが、聴いていると眠くなってくる。野次馬の中にととう眠り込んでしまうものが続出した。

「なんだ？こりゃ？人が化け物に…。」

「スキタイの羊。綿毛が高値で売れる。」

「いや、そうじゃなくって。」

「マスターの思考をトレース。質問に答えます。」

「 お願いします。」

「 正確には、スキタイの羊を模したノイズです。
私の宿敵にあたります。」

「 宿敵？戦うのか？ 」

「 スキタイの羊の餌は精神体です。
眠らせてから精神を食べます。」

「 じゃあ、あの眠ったり、
憑かれたりした人たちは…。」

「 このまま、目覚めない怖れもあります。」

「 やばいじゃん。ん…。」

「 なあ、君。」

「 私の名はミクとお呼び下さい。MIKUHATSUNE。
正式名、APA_010005_ MIKUHATSUNE。
“Mind Index Keening Unison for
Human with Android Trouble Shooter
and Ultimate Noise Emulator”の略です。」

「 APA_010005_? 」

「 精神追従式対防衛戦術型音響兵器の一万五番目のこと。
APA は、“Android of Phono-Aegis(or Arms)”の略です。
私のことは、ラヴリィに、ミクちゃん♥ とお呼びください。」

なんだかわからない用語がでてきた。しかも、意外にも、
この少女、意外とおちゃめらしい。真顔で、頼んでるし。
とにかく、先ほどから、疑問に感じたことを尋ねてみる。

「ふうん。ところで、ミクさん。」

「ミクちゃん♥と呼んで下さいと、申し上げたはずですが……。
なんでしょう？」

「俺には、何で奴の技が効かないんだ？」

「マスターは、私の保護下にあります。」

説明、終わり？なんのこっちゃ。
どうやら、詳しく聞くと、ノイズ・キャンセリングとやらが
働いているらしい。ノイズの精神攻撃から護る干渉波ということだ。
敵を見て、ミクは、唱太の指示を仰いだ。

「マスター。ご命令を。」

「命令といわれても……。」

「曲を思い浮かべるだけで、大丈夫です。」

「そういわれても……、うわっ！」

「ん、めえええええっ！」

今まで大人しく啼いていただけの羊たちが、突然、ライフル弾のような回転で二人に
向かって、軍艦の迫撃砲に匹敵する威力をもって体当たりをしてくる。

実から羊のしっぽにあたる場所まで、へその緒のような長い茎が
ちょうど発条(ばね)の役割をして、超音速の衝撃波をまとめて、
飛び出してきているのだ。

唱太は、とっさにギターを盾にしてしのいだが、百メートル近く
ふっとばされた。

「マスターっ！！」

ミクは、唱太を振り向きざま、護りにいこうとするが、すさまじい乱打に近寄れない。
なにせ、泣き声が聞こえたころには、攻撃を受けているのである。
攻めあぐねていると、ぬこが羊に向かい走った！

《つづく》